

「雑踏ケア」じわり定着

仙台・いずみの杜通所リハビリテーション

認知症患者や精神障害者の病気や障害の枠を超え、さまざまな人たちのケアにあたるデイケア施設「いずみの杜通所リハビリテーション」（仙台市泉区）が開所して10年たった。垣根なしのケアは利用者にも好評。「雑踏ケア」と称され、認知症介護の1つのモデルとして定着しつつある。

入所者「楽しい」

利用者スタッフ合わせ 通う泉区の女性(89)は、70人前後が集う。

1999年4月に開所した通所リハビリは木造2階の1階で、診療所と併設されている。中心となる約100平方メートルのスペースには、多いときで

32は言う。

抑制のためのひもが当たり前のようにある環境に疑問を持ったという。

「病気や障害で人を区別せず、それぞれの特徴を受け入れている」と田中さん。一般には徘徊はいかにとされる行為も、「外に出たい」という利用者の思いをかまえ、スタッフと一緒に散歩やドライブに出かけるとい

「大勢で笑ったり、語り合ったりすると楽しい。スタッフがいかに気を配る。」

「大勢集まれば、歩き回ったり、声を出したりする人が見つめられず、過ごせる。雑踏の寛容さ」と言う。施設を運営する清山会の理事長で、

「人が大勢いると、病気が見えてこない」とスタッフが

「10年間でようやく、理念にそったケアが芽吹いてきた。今後はひとり力を入りたい」と山崎さん。確かな手応えをもとに、さらなる一歩を踏み出そうとしている。

（生活文化部・肘井大祐）

大勢で過ごして安心感

時間を過ごす。固定席は配ってくれるので、安心

ない。マッサージに興じて過ごせる」と話す。

利用者の8割近くは認知症患者だ。うつ病や統合失調症など精神障害を

抱えた人もいるという。

8年前からリハビリに

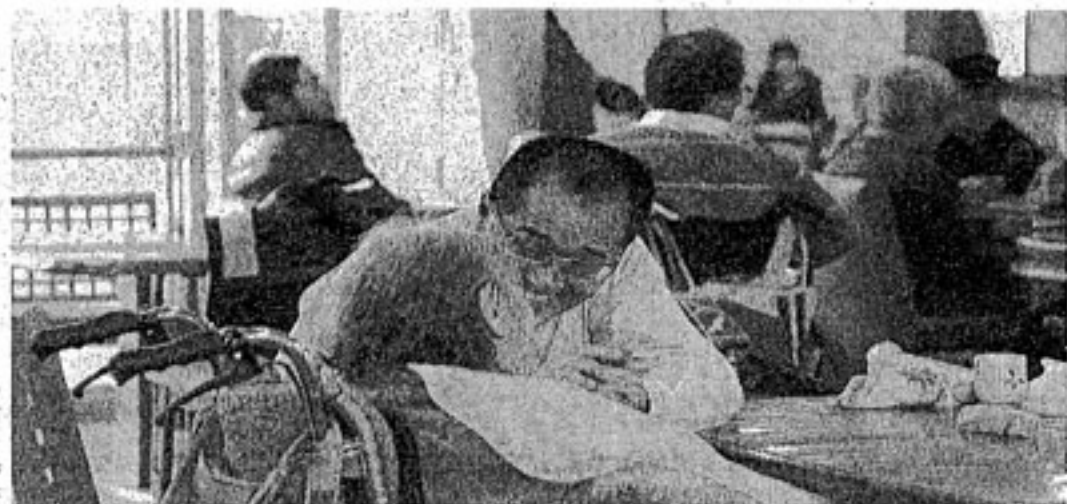
念として生きている。

開所当時は小人数のユ

ニットケアが主流となり

つつあった時代だ。大人

は途切れることなく、二



利用者（手前）に語りかけるスタッフ。大勢が集まる中でも、細やかに気を配る＝仙台市内